

王朝歌人
伊勢

山下道代

筑摩書房

山下道代 やました・みちよ
 昭和六年（1931）生まれ
 鹿児島県立女子専門学校国文科卒業
 『古今集 恋の歌』（筑摩書房，1987 年）

定 価 2470 円
 （本体2398円）

王朝歌人 伊 勢	一九九〇年十月二十五日 第一刷発行 一九九一年六月五日 第二刷発行	著 者 山 下 道 代	発 行 者 関 根 栄 郷	発行所 筑 摩 書 房 東京都台東区蔵前二ノ六ノ四 振替東京六一四一二三 電話東京五八七二六八〇（営業） 五八七二六七〇（編集） 製 本 厚 徳 社 印 刷 積 信 堂
----------	--------------------------------------	-------------	---------------	--

乱丁・落丁本の場合は、ご面倒ですが小社読者係宛にご送付ください。送料小社負担にてお取り替えいたします。

もくじ

序章

伊勢という歌よみ

3

忘れられた伊勢

6

一 出自と家系

父藤原継蔭

9

継蔭伊勢守任官の周辺

13

国司の娘

16

その祖真夏

20

祖父家宗

23

二 出仕まで

宇多即位

29

阿衡の紛議

31

温子入内

35

伊勢出仕

40

寛平期へ

42

三 はじめての恋

仲平という人

49

仲平との恋

54

三輪の山

61

四 大和下り

大和国府

69

伊勢の滞在先

73

竜門の滝

78

竜門拾遺

84

五 時平と伊勢

宮仕えにもどる

89

『伊勢集』に見る時平との恋

94

『後撰集』と『伊勢集』

101

『後撰集』に見る時平と伊勢

104

六 平中と伊勢

平中という人

113

貞文歌合

116

みつ恋ひ鳥

120

『平中物語』の中で

129

七 弘徽殿時代

寛平期後宮

137

寛平御時后宮歌合

140

帝に召される

宇多退位

148 144

八 朱雀院のころ

朱雀院へ

155

桂の里

159

御子の死

166

上皇出家

171

長柄の橋

174

九 亭子院にて

亭子院へ

179

温子のもとで

182

温子落飾

186

温子薨去

190

十 敦慶親王と伊勢

二品式部卿宮

197

『古今集』の中で

200

『伊勢集』の中で

203

親王薨去

209

十二 宇多法皇と伊勢

亭子院の法皇

215

京極御息所

219

京極院の花の宴

223

『伊勢集』の中の法皇

228

法皇崩御

233

十三 歌合歌と屏風歌

亭子院歌合の伊勢歌

239

京極御息所歌合の伊勢歌

243

四季恋物語屏風歌

249

長恨歌屏風歌

亭子院の屏風歌

斎院の屏風歌

終章

春の歌

恋の歌

終景

付表

伊勢関係略系図

皇統図

年表

参考文献

あとがき

和歌索引

299 297 295 288 287 286

278 274 271

265 263 257

王朝歌人 伊勢

山下道代

序 章

伊勢という歌よみ

今を去る千年あまりのむかし、平安の京で六十数歳と思われる生涯を生きたひとりの女性がある。

歌よみであつた。本名は伝わらない。十代のうちに、宇多天皇の女御温子のもとに出仕し、ここでは「伊勢」と呼ばれた。その女房名がそのまま歌人名となり、今に到るまで「伊勢」と呼ばれている人である。

伊勢が歌よみであつたということについては、少しく説明が必要であらうかと思われる。

当時の宮廷と、それを取り巻く貴族社会の人々にとって、とりわけその社会で生きる女性たちにとって、歌を詠むことは必須の教養であつた。いや、必須の生活技術であつたと言つた方がいいかもしれない。この時代のこの社会では、生活のさまざまな局面で、歌を詠み交わすことが多かった。特に恋の場のコミュニケーションは、歌なしには成り立たなかつた。だから、歌を詠む

ということだけでならば、またその歌の巧拙を問わないとするならば、この時代のこの社会の女性たちはみな歌よみであつたし、歌よみであらざるをえなかつた。

伊勢が歌よみであつたというのは、しかし、その次元での話ではない。当時は、宮廷を中心にして歌合が催されたり、儀式・遊宴などの折に献歌が求められたりした時代、また、屏風歌がよく詠まれた時代である。

屏風歌というのは、室内調度としての屏風に使われる歌のことである。屏風にはいろいろの図柄の絵が描かれていて、歌はその絵の賛のような意味で書き加えられた。屏風の面に、色紙形しきしがたといつて方形のスペースが設けられており、そこに歌を書くのである。そうした屏風は、宮廷や貴紳の家の慶事——たとえば四十賀五十賀などの算賀や、女兒の裳着もぎ、男児の着袴ちゃくこの祝いなど——の折に詠あえられたり、贈物として調えられたりしたようである。したがつてその屏風に描かれる絵や歌は、その時代の名ある絵かきや歌よみや書家のものがよろこばれた。

このように歌は、個人の私的日常生活の場で詠まれるものであるばかりでなく、献詠のように儀式や行事の中にとりこまれたものとして、また歌合のように公的な催しとして、あるいは屏風歌のように公開された場で人々の鑑賞に耐えるべきものとして、詠まれるようになっていた。伊勢は、歌がこのように公的性格を帯びはじめた時代を生き、この時代の女性としてはただひとり、献詠や歌合歌や屏風歌に、少なからぬ作品を残している歌人である。

当時、こうした公的詠歌の場でもっともめざましく活躍したのは、紀貫之であつた。他撰本の『貫之集』に現存する歌は約九百首。その半数以上が献詠や屏風歌だ。そこには随処に、「内裏うちの

仰せによりて奉る」とか、「内裏の御屏風の歌」とか、「宣旨によりてこれを奉る」とかの詞書が見られ、そのほか高位貴顕の家の求めによつて詠じたという詞書は、応接にいとまがないほど次々に立ち現われる。個人の家集に、この種の歌が五百首以上も並んでいるさまは、壯観というのほかなく、それは、この時代の他のだれの家集にも見られないところのものである。中には、こんな歌をよく注文者が黙つて受け入れたものだ、と思いたくなるような凡庸の作もなくはないが、貫之の歌、ということとで充分通用したのだろう。当時のこの人の、売れっ子ぶりがよくうかがわれる。

伊勢は、この貫之と同時代を生き、召しに応じ求めにこたえて、歌合歌や屏風歌を詠んだ。

『伊勢集』に残るそれらの歌は、貫之に比べると、数にして一桁は違うけれども、『貫之集』に時折見かけるような退屈な歌は、伊勢にはない。

『古今集』への入集数を見ると、貫之は百二首、伊勢は二十二首。数字だけ比べるとかけ離れているようだが、これは貫之が特別多すぎるからであつて、貫之につづく歌人たちを、凡河内躬恒六十首、紀友則四十六首、壬生忠岑と素性法師三十六首、在原業平三十首と見てくると、その次に位置する伊勢の重さはよくわかるだろう。女流としては最多入集者で、小野小町の十八首を越えている。

『後撰集』の中の伊勢は、貫之の七十四首に次いで七十首。後統の躬恒と藤原兼輔が二十三首だから、伊勢の存在の大きさは明らかである。貫之も伊勢も、歌合や屏風歌での活動が盛んになるのは、『古今集』以後のことであつて、同時代の世評は、『古今集』より『後撰集』によりよく反

映しているかと思われる。晩年、あるいは歿後まもないころ、伊勢には、貫之と比肩するほどの盛名があつたのである。

忘れられた伊勢

にもかかわらず伊勢の名は、後代次第に忘れられて行つた。今日、小野小町なら知っているが、伊勢なんて知らない、という人は少なくないだろう。百人一首中の女流で考えてみても、たとえば和泉式部や紫式部、清少納言らに比べて、伊勢の知名度は格段に低い。これらの人々は、伊勢の前では、いわば素人の歌よみにすぎなかつたのに。

伊勢の名は、歿後ただちに忘れ去られたのではない。その後の勅撰和歌集の世界、特に八代集の中では、依然古今・後撰の高名な歌人として意識されている。藤原公任の「三十六人撰」をはじめとして、俊成・定家らの秀歌撰にも、伊勢の名が洩れたことはない。やや通俗的な例をあげると、能因法師が伊勢旧邸の前を車で通りかかったとき、あわてて車をおりて歩行し、伊勢遺愛の松に敬意を表した、という説話もある。

しかし伊勢は、あまりに純粹に勅撰和歌集世界の歌人でありすぎたのかもしれない。中世以降、勅撰和歌集の世界がその内側からエネルギーを失いはじめ、やがて消滅へと向かつたとき、伊勢の記憶もまた、必然的に薄れて行かざるをえなかつた。

たとえば『古今集』の中で、女性としては伊勢に次ぐ入集数のある小野小町。この人には、かなり早くから勅撰和歌集の世界をはみ出すイメージがあつたが、そこへさまざまな説話や伝説が

付着して、いわば小町像の大衆化とでも言いたいような現象が生じた。歌や恋にかかわって次第に増幅されてゆく小町像には、まさに虚像が虚像を呼ぶという観があり、やがて仏教思想の波をかぶって、六道絵の中に腐乱死体となって描かれるところまで行くと、これはもう、虚像という次元を越えたグロテスクな肥大化だ、と言わざるをえない。

しかし伊勢の上には、そのような大衆化も起こらず、虚像も生じなかった。伊勢は、ただ勅撰和歌集の世界とともに消滅し、忘れられて行つた。人は、消滅したものの上になにもものをも加えることができない。またそこから、なにもものをも減ずることができない。忘れられた伊勢は、失われた古典和歌世界の中で、変わることなく伊勢でありつづけた。宇多・醍醐・朱雀朝のすぐれた歌よみとして、本来あるべきところのみ、ありつづけた。伊勢の上に、たとえば小町に見られるような、虚像の肥大化という後代の恣意的暴力が加えられなかったことを、ひそかによるこぶ気持が、実は私にはある。

